

# R-ネット瓦版 第10号

## 『安佐南区の医療と病診連携』

広島市安佐南区は人口22万8千人にのぼり、広島市では今や最も人口の多い区になっております。今後の予想も日本の人口が減少する中、広島市の人口も減少が予想されていますが、その中で唯一、2035年まで人口が増加し続けると考えられている区です。そして、安佐南区はアストラムライン、高速4号トンネルの開通により、安佐市民病院の存在する安佐北区とは事情が違い、多くの人たちが旧市内へと思考が向いている地区になっています。医療においても同様で、旧市内にある多くの病院を受診される患者さんが多いことは紛れもない事実です。救急医療においても同様で、小児は舟入病院へ、大人は広島市民病院へ受診される傾向がとて強いと思われます。同じ安佐医師会でありながら、安佐北区の事情とはかなり異なる状況が見られる安佐南区ですが、だからこのままでよいということではありません。

5年以上前のことと思いますが、その頃安佐市民病院に在籍されていた先生が、休日当直の状況を安佐医師会の会員に訴えられたことがありました。開業されているA会員の紹介無しに、いかに多くの患者様が安佐市民病院を受診されるかということ、アポ無しの受診が診察する側にとっていかに大変なことか、病診連携の大切さを説かれた内容であったと記憶しております。そのことを契機にといっても過言ではないと思いますが、病診連携について真剣な議論が展開されるようになってきたこと、安佐医師会館において、安佐市民病院を中心とした多くの勤務医会員、安佐南北の開業医会員が集い、白熱したディスカッションがなされました。この会がきっかけとなり、安佐医師会における病診連携は急速に波及していったと思っています。安佐南区の多くの開業会員も安佐市民病院との連携を密にしようと思っていることは紛れもない事実ですし、現に、安佐南区会員からの安佐市民病院への紹介率が少ないわけではありません。安佐医師会の機関病院である安佐市民病院が益々発展するためには、安佐南区の開業会員の皆様の安佐市民病院への思いと、安佐市民病院のスタッフの皆様の、安佐医師会の中に存在しているという思いが結びつくことが、両者のより一層の発展になるのではないかと考えております。大腿骨頸部骨折から始まった地域連携クリティカルパスは、脳卒中、癌、心筋梗塞などに拡大されようとしております。多くの開業会員が、このパスにも参加できるようお互いに努力していく必要があります。

一方、安佐市民病院の勤務医の皆様の過重労働についての提案があって、しばらくの期間が経過いたしました。市民運動の経緯もあり、安佐医師会では当初、小児科の時間外診療を提案しておりましたが、現在は内科の広島市北部時間外診療所の設立について、行政とともに計画を練っているところです。

安佐医師会の存在する安佐北区、安佐南区の人口をあわせると38万人にもなる2区であり、特に安佐南区においては、今後高齢者、小児ともにその人口は増加傾向になるものと予想されます。その基幹病院としての安佐市民病院はより重要な役割を担うこととなります。今後、新築の時期が来るものと思われますが、より近代的なハード面の充実と、優しさのあふれる、そして活力のあるより素敵な病院への益々の飛躍を願っております。

(安佐南区医師会会長 伊藤 仁)



## ☆新型インフルエンザに備えて☆

新型インフルエンザ(H1N1)は、メキシコを発端として米国から欧州や日本、さらにオーストラリアなど、冬季にさしかかった南半球を含む多数の国に拡大しました。日本は今秋、冬には第2波として、渡航者と無関係な人々の間で感染が持続し、再び流行が起きると懸念されています。新型インフルエンザ第2波に対して、どのような準備が必要になるのでしょうか？今回、日本での発生に対して、医療機関(感染者病床数、発熱外来)、医師・看護師、抗ウイルス薬、迅速キット(確定診断)、ワクチンが準備されていないなどの問題点があげられますが、数ヵ月後の第2波を迎える短期間では、この問題点がすべて解決できるとは考えにくいと思われま



そこで、その準備のポイントとして以下に記します。

- ① 新型と季節性インフルエンザは区別しにくい。陰性であっても、必ずしも新型インフルエンザを否定できない。このことから、新型のみだけでなく、季節性インフルエンザの感染予防策も含めて、日頃から咳エチケットについて啓発する(季節性インフルエンザ感染対策の重要性を再確認、遵守する)。
- ② 医療従事者だけでなく、医療施設に関わる事務員も含め、全員にワクチン接種を行う。
- ③ ノロウイルス発生に準じた面会制限へのアナウンス、掲示を行う。入院患者、入所者の外出、外泊後の状態監視など、施設内への持ち込みを防ぐ。あるいは、早期発見、隔離などの感染拡大防止を行う。
- ④ PPE(マスク、手袋など)に頼り切らず、頻回の手洗い、うがいを行う。  
医療施設として丸腰で対応するのではなく、備えを実施することで、入院患者、入所者、医療従事者への悪影響を最小限に抑えることが大切と思います。

(感染管理認定看護師 大野 公一)

## ◇◇《つばさ友の会》◇◇

(日本糖尿病協会 広島県支部 安佐市民病院分会)

《つばさ友の会》は、安佐市民病院受診中の糖尿病患者様と医療スタッフの友の会です。医療スタッフは、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、臨床検査技師、歯科衛生士、管理栄養士が入っています。平成11年5月に、正式に発足しました。現在、会員数が52名となっています。

《つばさ友の会》の名称の由来をご紹介しますと、安佐市民病院の安佐は「ASA」と書きます。「TSUBASA」中に「ASA」を盛り込んで、未来へ羽ばたく願いをこめて命名しています。

糖尿病とともに明るく健やかに過ごせるように、糖尿病予防・治療の正しい知識を提供する場として、糖尿病患者様と医療スタッフが共に親睦を図りながら活動しています。

糖尿病広報誌「つばさ」の随時発行や、地域に公開した「糖尿病講演会」では糖尿病の最新情報を聴いたり、合併症予防について日常生活の管理のことや食事療法についての知識を深めたりしています。安佐地区医療施設の糖尿病友の会と合同で行なう「ビーチボールバレー大会」や、新年会の「糖尿病養生訓のかかるた大会」は恒例の行事になっています。年配の

方から子供さんまで参加して、チームに分かれて熱戦が繰り広げられます。共に爽快な汗を流し、日頃のストレス解消にもなっています。大会後の糖尿病患者用のお弁当の昼食も好評です。また、「さわやかウォーク&みんなでトーク」と題して、春と秋には安佐市民病院近隣の太田川の土手などを歓談しながらウォーキングしています。各種行事には、会員は家族や友人同伴で参加して、楽しみながら勉強し、悩みや体験などを語り合い情報交換を行っています。

**あなたも《つばさ友の会》に入会して、一緒に活動しませんか！**

秋には、広島市中央公園で歩いて学ぶ「広島市ウォークラリー」を、複数の医療施設がタイアップして開催しています。毎年 200～300 人が参加します。5～6 人のグループでチェックポイントを探して、クイズやゲームをしながら歩くラリーです。会員以外の方も参加できますので、秋の一日をみんなで一緒に歩きましょう。

**糖尿病講演会**



**ビーチボール・バレー大会**



**新年かるた大会**



**ビーチボール・バレー大会後の食事会**



**さわやかウォーク&みんなでトーク**



**《つばさ友の会》入会申し込み》**

- \* 対象 一般会員は安佐市民病院受診中の糖尿病患者様  
会費(銀行振込みとなります)

入会金(初回のみ)	500円
年会費	1,500円
合計	2,000円

- ・会員には日本糖尿協会発行の糖尿病月刊誌「さかえ」(定価:500円)を毎月外来日にお配りします。
- ・行事開催時には実費程度を徴収します。

\* 申し込み用紙

内科外来6診にあります。

\* お問合せ先

つばさ友の会事務局(広島市立安佐市民病院 栄養室)

Tel(082)815-5211 (内線 2250)

または内科外来6診へお尋ねください。

(栄養室専門員 高崎 栄子)

## ＊ ＊ ブレストケアチームの活動 ＊ ＊

乳がんの罹患率は年々増加し、女性のがん全体の第一位となり、20人に1人が乳がんになると言われています。当院においても、手術を受けられた患者さまは、1997年に73例、2004年89例、2007年102例と増加しています。毎月、8～9名の患者さまが入院され、手術を受けています。乳がん治療は、年々高度化・複雑化し、手術療法・放射線療法・化学療法・内分泌療法などを組み合わせて行う集学的治療が行われています。その過程において、患者さまは身体的・心理的・社会的な問題や苦悩を抱えながら、多様な役割を果たし、治療法の選択において自己決定し生活している現状があります。このような患者さまに対して、医療者は患者さまを多方面に捉え、生活の質(QOL)の向上をめざした治療やケアの提供が必要であり、そのためにはチーム医療が必要と言われています。

当院では、外科病棟において1997年にブレストケアチームを発足し、チーム医療の活動の一環として、外科医師、外科病棟・外来看護師、中央処置室看護師、薬剤師、栄養士などのスタッフが、乳がん患者さまのケアの質の向上を目指し、患者会を行っています。

がん患者が精神的な支援を受けたり、お互いに支えあったりする「ソーシャルサポート」は、QOLを上げるとともに経過にも良い影響を及ぼし、患者会はソーシャルサポートの有用性があると報告されています。現在当院では、患者会として「和(なごみ)の会」「元気の会」を毎月第3水曜日に開催しています。「元気の会」は、手術早期の方を対象とし、ブレストケアチームが集まり、症状、治療法などに関する悩みの相談を行っています。「和の会」は、当院で乳がん手術を受けられ、外科外来に通院中の方が参加されています。手術後も継続して治療や通院をされる患者さまの意欲向上、医療知識の習得、気分転換を目的として、医療者が発起人となり1997年より「和の会」、2002年より「元気の会」を開催してきました。現在、「和の会」は約100名の会員がおられ、行事としては年1回の総会と日帰り親睦バス旅行を行っています。

3月14日、当院講堂で80名(うち医療スタッフ11名)が参加し、第14回「和の会」総会が行われました。総会では、例年通り、活動報告・会計報告・会計監査報告・世話人および役員の紹介が行われました。そして、久松医師が出演されたテレビの「いきいき健康ライフ」の「おしえてドクター、乳癌編」のDVD鑑賞、その後、久松医師による「最新の乳癌治療について」の講義、質問コーナーがあり、和やかな雰囲気の中ですべてのプログラムが終了しました。講義では、専門用語の難しさに戸惑いつつも、乳がんの治療について真剣に耳を傾けておられる会員の方の姿があり、質問コーナーでは、身近な疑問や自分の症状、行っている治療についてなどたくさんの質問があり、一つ一つ医療スタッフが答えていきました。「来てよかったです。」「元気をもらえました。ありがとう。」「来年もまた元気で会いましょう。」と笑顔で握手をしながら話されて帰られる姿は印象的でした。今回の総会は、「和の会」の方が準備から司会進行までのほとんどを行われており、医療者から患者さまが主体となり運営される会となってきています。

これからも、ブレストケアチームとして、「元気の会」「和の会」を開催していくと共に、支援していきたいと思っております。

(看護師長 松原朱美)



## ☆☆ 健康祭り ☆☆

～今年も笑顔がいっぱいあふれました～

6月6日に行われた健康祭りには、約450名の地域のみなさまのご来場をいただき、今年も笑顔いっぱいの健康祭りとなりました。

今年は趣向も新たに、文教女子大附属高校の吹奏楽部の演奏で、幕を開けました。明るく元気で楽しい演奏は、まさに健康祭りに相応しいオープニングとなりました。安佐北消防署には救急車の展示と案内をお願いし、可部カラスの会の皆さんには「贗金造り可部南原屋事件」の講談演技で花を添えていただきました。

販売コーナーでは「つくし工房」と「ウイング」さんによりいつもの美味しい飲み物やクッキー、手作り手芸品を準備していただき、福祉協議会女性会の皆さんにはうどんの販売、地域JAのご協力で「よがんす可部」さんには新鮮野菜の販売していただき、大変好評でした。

健康ウォークの上野さんには正しい姿勢で歩くことの大切さをご指導していただき、「コスモス」さんの健康体操と共に日頃の運動不足で硬くなった身体もすっかりほぐれました。安佐市民病院の乳癌患者会「和の会」の皆さんには、癌の早期発見・早期治療の意義と癌検診の啓蒙、手芸などを通してがんと共に明るく生きることのすばらしさを教えていただきました。また、特別参加の毎日書道展審査会員の西村九十さんには、参加者の希望に沿って毛筆をしたためていただきました。

放射線科による骨塩測定は今年も好評で長蛇の列ができ、魚や動物のレントゲン写真の展示には子供たちの驚きと喜びの笑顔があふれました。看護部健康相談コーナーにも体脂肪や血圧測定、検査コーナーでの血糖測定などに多くの皆様が訪れ、相変わらずメタボリックシンドロームへの関心の高さを伺い知ることができました。

妊婦、授乳婦のコーナーでは「赤ちゃんふしぎクイズ」の難問珍問に、多くの参加者が挑戦していました。禁煙相談コーナーにも多くの皆様が訪れ、禁煙意識の向上が図られたものと思います。薬剤部のコーナーでは日頃の内服薬について相談する方、栄養相談のコーナーでは日頃の摂取カロリーについて再確認する方もみられました。歯科の歯磨き相談コーナーでは歯科衛生士による歯磨き指導に、年齢を問わず多くの皆様が相談に訪れてくださいました。保育コーナーでは臨床検査室職員の若いママさんが、子供たちと魚釣りゲームやお絵書きを楽しみ、「手作りリサイクルおもちゃの田島のおじちゃん」のコーナーには親子で木工細工などを楽しむ微笑ましい場面が今年もみられました。リハビリ科的な当てゲームでは

大人はストレス解消、子供たちには笑顔と歓声があふれました。安佐北消防署の皆さんには今年も救急時の心肺蘇生の実演とAEDの体験指導をしていただき、命の尊さを実感していただくことができたものと思います。

今一度、健康について考えていただく機会として、健康祭りを企画して6回目を迎えましたが、これからも、年間行事の一つとして、地域の皆様と共に造り上げるイベントとなりますようお願いしています。

参加された皆様、楽しい一日をありがとうございました。

(健康祭り実行委員代表 長崎信浩)



## 各診療科のご紹介シリーズ第10回 《小児科》

当院小児科は、広島市立安佐市民病院開設以来、内科、外科とともに地域医療の一翼を担ってまいりました。開設当初からは田辺恭二小児科部長が、そして平成7年度からは今日に至るまで和合が小児科部長として、“患者様に満足度の高い小児医療を展開する”ことをモットーに運営してまいりました。

小児科は成長・発育している子どもたちが対象ですので、小児科が取り扱う疾患の多くは感染症ということになります。小児は成人と異なり、獲得免疫系がまだ十分に発達しておらず、その機能を十分に発揮できないまま、必然的に自然免疫系が感染防御の中心とならざるをえないことが多くなります。その結果、乳幼児では免疫系の破綻をきたし易く、病気の重症化や合併症の併発はもとより、予想外の不幸な転帰へと帰着する危険性をもはらんでいます。私たち小児科医は、これらの危険性を十分に察知し、より適切で安全な状態へと子どもたちを導いていく責務があります。そのためには、小児科医すべてが感染症や免疫のしくみについて熟知精通し、日頃から絶えず研鑽を積んでいく必要があります。患者保護者の“質の高い小児医療の恩恵を受けたい”とのご要望にこたえるために、小児科スタッフ一同精進を重ね、必死の努力を続けております。

小児領域では、内科と同様に、神経、内分泌、呼吸器、消化器、循環器、腎泌尿器、血液、アレルギーなど、あらゆる分野の疾患があります。それに加えて、院内出生の病的新生児、小児言語療法の診察も当科の守備範囲となっています。当院小児科は臓器別診療を行うほどの人的余裕は無く、臓器別診療への細分化は困難です。しかし、小児科医師それぞれが持っているサブスペシャリティを活用しながら、これら多彩な小児疾患に対して積極的アプローチを行っております。さらに広島大学小児科はもとより、広島県各小児専門施設や全国ネットワークを利用し連携を図りながら、適切な診断と治療を遂行することをモットーに小児診療を展開しております。

## スタッフ紹介

**和合 正邦**（主任部長）：昭和53年卒、昭和57年小児科医としてスタート、平成6年赴任。小児感染免疫、小児リウマチ、小児腎、小児神経、小児アレルギー、小児内分泌などを中心に、小児ジェネラリスト・小児専門医として、老体に鞭打ちながら多くの患児を対象に職務を遂行しています。

**藤田 篤史**（部長）：昭和60年卒、平成12年赴任。小児腎、小児アレルギー、小児血液、小児神経、小児糖尿病・内分泌、新生児医療などを中心に、オーソドックスな小児医療を展開しています。統計学に強く、一人一人に十分に時間をかけた懇切丁寧なインフォームド・コンセントが定評の小児専門医です。

**荒新 修**（部長）：平成2年卒、平成15年赴任。感染症はもとより、小児循環器を中心に、川崎病、小児神経、新生児医療などで手腕を発揮している小児専門医です。点滴技術に長け、当科一の勉強家だとの噂もあります。

**古川 逸樹**（医師）：平成15年卒、平成21年赴任。関東で3年、広島市民で3年、東広島で半年とそのキャリアはすでに一人前の小児専門医です。小児ジェネラリストとしてプライマリケアを中心に小児医療を展開しています。今、一番脂が乗った旬の小児科医といえるかもしれません。

**西 香代子**（医師）：平成18年卒、平成20年赴任。初期研修終了後、当科で後期研修医としてスタートを切った小児科医です。飲み込みも早く、積極性も十分で、その働きぶりには目を見張るものがあります。広島期待の小児科医です。



### 小児科外来

外来は、午前は2診体制で、外来診療一覧表のようになっています。また午後には特殊外来を一覧表のように行っております。医療連携室を通してご紹介をお願いいたします。また現時点では、日曜日に限って6～10pmの受付で夜間小児診療を行っております。

### 小児科外来診療担当表

午前	月	火	水	木	金
1診	和合	西	和合	西	古川
2診	荒新	藤田	古川	荒新	藤田
リハ外来	和合 (言語)		和合 (言語)		和合 (言語)

午後	月	火	水	木
1診	西	乳児 検診	和合	和合
2診	藤田	乳児 検診		藤田
3診		乳児 検診	荒新 (心臓)	
リハ外来	古川 (言語)			西 (言語)

(月、金の午後は特殊検査あり)

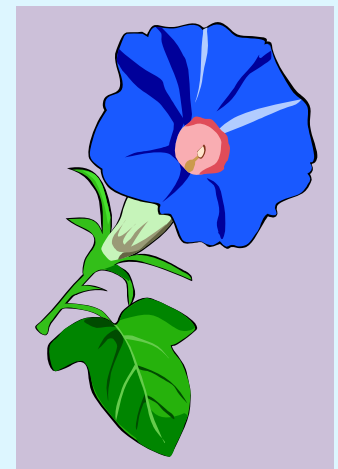
### 小児科外来と入院患者

外来受診者数の推移では、ここ数年、外来患者数の減少が進んでいます。安佐地域の開業の先生方との業務の住み分け・医療連携が順調に進んでいるものと思われま

す。和合が赴任以来の小児科入院統計を示します。当院小児科ベッド数は20床ですが、ここ数年、入院患者の減少が続いています。県内各小児施設でも同様の傾向が見られています。

今後も地域の先生方のご指導ご鞭撻を賜りながら、よりいっそう信頼される小児医療を展開していく所存です。

何卒よろしく  
お願い申し上げます。

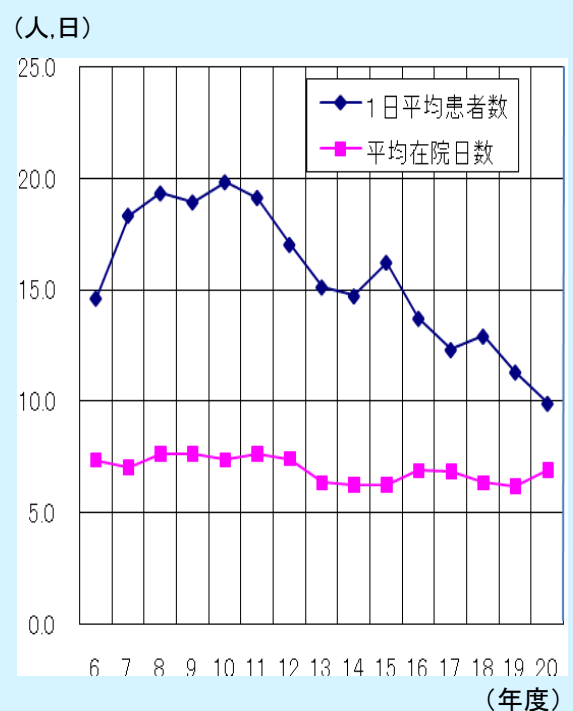


(小児科主任部長 和合 正邦)

### 小児科入院患者数(平成6年度～20年度)

年度	診療 日数	新入院	退院	実患 者数	在院患 者延数	1日平均 患者数	平均在 院日数
6	365	716	740	726	5,343	14.6	7.3
7	366	955	961	968	6,704	18.3	7.0
8	365	924	929	947	7,060	19.3	7.6
9	365	904	911	927	6,904	18.9	7.6
10	365	978	988	999	7,225	19.8	7.3
11	366	916	920	938	6,977	19.1	7.6
12	365	837	837	856	6,195	17.0	7.4
13	365	868	878	886	5,527	15.1	6.3
14	365	854	869	862	5,373	14.7	6.2
15	366	950	952	965	5,918	16.2	6.2
16	365	726	736	746	5,015	13.7	6.9
17	365	658	661	670	4,502	12.3	6.8
18	365	738	749	757	4,704	12.9	6.3
19	366	674	676	687	4,153	11.3	6.2
20	365	517	529	529	3,622	9.9	6.9
合計	5,479	12,215	12,336	12,463	85,222	15.6	6.9

### 1日平均患者数・平均在院日数推移



平成21年4月～6月 病床利用状況

科 別		新入院患者数	退院患者数	平均在院日数
内 科	総合内科	9	7	9.8
	循環器科	321	322	7.9
	消化器科	426	404	10.1
	内分泌科	21	24	20.8
	呼吸器科	160	152	23.2
	血液内科	60	61	34.0
	神経内科	67	74	18.9
	内科計	1,064	1,044	13.5
外科		343	353	16.2
整形外科		262	249	23.1
脳神経外科		107	107	17.3
心臓血管外科		107	112	20.6
小児科		150	145	7.5
産婦人科		351	366	8.9
皮膚科		51	49	10.3
泌尿器科		167	170	7.8
耳鼻咽喉科		84	83	12.2
眼科		122	117	7.7
神経科		8	8	60.1
放射線科		42	45	30.6
麻酔科		52	44	7.2
リハビリ科		0	0	0.0
合 計		2,910	2,892	13.8

医療連携システム利用状況(件数)

依頼内容	平成21年		
	4月	5月	6月
C T	103	120	123
X 線	3	1	7
M R I	28	24	40
内視鏡(胃)	29	29	37
その他エコー等	25	14	15
外来予約	903	865	1,024
総 計	1,092	1,053	1,246
1日平均予約数	52.0	58.5	56.6



\*\*\*医療連携室よりお知らせ\*\*\*

早いもので、平成21年も半分過ぎました。今年は歴史的な不況、政治の迷走、新型インフルエンザの大流行と、心配ごとが絶えません。その上、カープはマツダスタジアムの新球場効果にもかかわらず、やっぱり下位に低迷しています。今年後半には良いことが有りますように祈りたくります。

さて、広島市立安佐市民病院では、今年度中に地域がん診療連携拠点病院の指定と病院機能評価(Ver.6.0)の更新を2大目標に努力しております。今年度末には、皆様に良い知らせを発信したいものです。引き続き皆様のご支援をお願い申し上げます。

R-ネット瓦版では、皆様の投稿をお待ちしております。医療連携に関すること、地域の医療関連の出来事など、気軽に投稿してください。

広島市立安佐市民病院 医療連携室  
 TEL 082-815-5211(内線 3250)  
 FAX 082-815-5691  
 『R-ネット瓦版』編集WG  
 代表 多幾山 渉

